

歴史群像シリーズ

天真正伝香取神道流剣術

柳生心眼流竹翁舎剣術

薬丸自顕流剣術

DVDセレクション 日本の剣術

— 術技詳解 —

歴史群像
編集部／編

DVD付

Gakken



天真正伝香取神道流剣術詳解

剣術諸派の源流といわれる神道流。香取大神から授けられたとされるその剣技は、六〇〇年間、連綿と香取の地に伝えられてきた。我が国が誇る名流の秘伝に迫る。

写真には香取神宮境内に居合術を演武する宗道寺利師殿代。肖像は流祖殿修長殿高家直公。



日本武道発祥の地、香取に伝わる名流



六百年守り伝えた奇跡の剣

千葉県佐原市香取に鎮座する香取神宮。古来、鹿島神宮と並び「鹿島・香取の太刀」と呼ばれ、武神・経津主大神を祭り尊ばれた。遠く奈良時代には防人たちがこの両所において剣技を学び、任地に赴いたことで「鹿島立ち」の言葉を生んだといわれる。

現在でも千葉県一宮として崇拝されており、武道の神として鹿島神宮とともに全国の武道修行者の尊敬を集めている。

天真正伝香取神道流剣術は、ここ香取神宮をその発祥の地とし、室町時代に誕生した。その剣技は今もこの香取の地に連綿と伝えられているのである。今を遡ること約六〇〇年前の元中4年（一三八七）、流祖飯篠長威斎家直は下総の国飯笹村の郷士の家に生まれた。幼少より武術をよくし、主君千葉氏に仕えて数多くの合戦に参加するも、一度も破れることはなかったといわれる。そののち千葉氏が滅亡、長威斎はこの香取神宮奥の宮近くの梅木山に隠棲する。そうして六十余歳に至って香取の宮の祭神、経津主大神に千日千夜の大願を起し、齋戒沐浴、厳しい修



6頁上段は飯篠長威斎の墓。中段、飯篠宗家敷地に祀られる軍神・摩利支天。下段は大竹師範が教える神武館道場の稽古風景。中央、香取神宮社殿。7頁左上、飯篠長威斎夫婦の像。下は門弟の指導に当たる大竹利典師範である。



行を重ね、梅の古木の上において、ついに香取大神から託宣を受けた。「汝後に天下剣客の師とならん」と、兵法神書一卷を授けられたと伝えられる。

その後長威斎は驚異的に一〇四歳まで長命し、新陰流の祖となった上泉伊勢守秀綱（後に信綱）や鹿島新当流の塚原土佐守（卜伝の父）、鹿島神流の松本備前守など、後の剣術の源流となった剣聖たちを教えたといわれる。すなわち、神道流が剣術諸派の源流とされる所以である。

香取神宮奥の宮近くには長威斎と歴代の高弟、ゆかりの剣士たちの墓が並ぶ。静かな木立に囲まれ、たたずめば現代社会の喧騒を忘れさせてくれる。その近くには敷地内に軍神・摩利支天を祀る飯篠宗家の道場がある。道場は三〇〇年以上を経たものでその柱や床板は見るからに歴史を感じさせるものである。狭く、三組が稽古するのがやっつとであるう薄暗い道場。ここで古の業が連綿と伝えられてきたのである。

香取神道流は、現在第二十二代宗家飯篠修理亮快貞氏と師範、大竹利典氏によってその道統が守られ、今も多くの門弟たちがその秘伝を学ぼうと熱心に修行を続けている。

香取神道流剣術の基本

香取神道流は剣術の源流にふさわしく、後に発展した素肌剣術以前の介者剣術、すなわち甲冑を着用した剣術の技法を多く伝え、また、居合術も実戦的な技法を多く残している。ここではまず香取神道流の基本となる「構え」を中心に見てみよう。



巻き打ち

神道流の形で多用される打ち込み方で他流ではあまり見られない。兜を着用している状態では、頭上に剣を振りかぶることができない。そのためこのように遠心力を使って体の外側で大きく振って勢いよく斬り込むのである。

清眼の構え

基本の構えである。他流の正眼（剣道中段）の構えに近いが、特徴的なのは両足のかかとを床に付け、後足を大きく撞木に開くこと。剣道ではつま先立ちで、撞木足は忌まれるが、甲冑を着用した想定では撞木足で踏ん張り、かかととは上げない。肩、肘は楽に構え、切先は相手の顔面につける。

古流をよく残した技法

香取神道流剣術の最大の特徴は甲冑を着用した時代、つまり戦国時代以前のからの刀法を伝えているということだ。清眼（他流では主に正眼）、陰（八相）など剣術ではおなじみの構えも、神道流ではかかとを地面につけ足を撞木に開いて構える。これは甲冑を着用して踏ん張るところからきており、現代の剣道と比べると理論が正反対だ。だが、古流は幾多の実戦の中から生み出されており、道場の中から生まれた剣術とは根本的に違う。

刀を握る手の内も、一般的な居合とは異なり、右手は鐔元いっぱい、左手は柄頭いっぱい握る。だが、これも素肌剣術と介者（甲冑武者）剣術の違いからきており、薙刀、槍などの頑丈な長物に打ち負けぬよう梃子の原理を使っではね飛ばし、斬り結ぶ工夫からきている。

また、ひとつの形が他流に比べ大変長いのも特徴だ。だが「受ける間があれば斬れ」と教える神道流の技は本来長くつなげるものではない。実は鎧の隙間、すなわち草摺の揺るぎの糸部分や裏小手を斬って敵を一瞬に倒すこと



笹隠れの構え

これも神道流独特のものだ。剣を持った拳を頭の右側につけ左半身となる。左手を相手に向かって伸ばし手を大きく開く。このように構えることで相手にこちらの姿を隠し、距離感を誤らせる。

このように掌が大きく立ちほだけり、相手の動きが読みづらい。昔の武芸者の工夫といえよう。



陰の構え

他流でもよく見られるいわゆる八相の構えだが、古い流派の八相は現在の剣道で教える八相よりも構えが高い。足は大きく撞木に開く。この構えは、一対一で距離がある場合、他にも敵がいる場合などに有効な汎用の構えで実戦度が高い。



真の構え

刃を上に向けて剣を抱くようにして構える。腰を低く落とし、剣を動かぬように固定するこの構えは、古い流派に似た共通点があり甲冑で斬り合う際に鍔の隙を狙うのに適していると考えられる。



にこそ神道流の本質がある。だが、その技の多くは裏技として隠され、けつつけて見破られぬよう、わざと技を長くつなげて形が作られているのである。これは技の本質を秘匿するだけでなく、実戦で息が上がらぬよう、剣道の掛り稽古に相当するトレーニング方法でもある。また、剣を受けねばならぬ場合の対処法も同時に教えており、鎧で受け流すような技はなく、刃でがちり受けた上で体を転換して攻撃に転じるように教えているのである。

後ろから見たところ

居合腰を後ろから見たところ。屋内でもこのようにつま先を立て、息をこらして敵を待つ。



居合腰

右足をやや前方に出し、左膝をついて両足のつま先を立てた姿勢。体重は7割を左かかとへ、3割を右かかと左膝にかける。どこから相手が来ようと素早く動ける。



ポイント

他流に見られない独特の手掛けと血振り

抜きつける前に、刀を刃を外側に倒しながら右手の甲を軽く柄に乗せる。このように手を運んだほうが手にひねりが加わり、抜きつけが速くなるのと、袖がじまにならないように落とす工夫である。

柄に手の甲を乗せたところ。このようにすると袖が長い紋付などでも袖全体が肘方向に落ちる。また手裏剣を投げのような感覚で抜きつけに手首のスナップが効く。



抜きつける前は人差し指を鐙にかけておく。後ろから鞘を取られたり、柄を取られて剣が抜けるのを防ぐためである。



独特の血振り。右手を刀の柄に引っ掛けて、柄頭を握った左手を中心に、クルッと柄を回転させる。その上で右拳で柄をトンと叩く。実際に血が振るえるかは疑わしいのだが、技の区切りとしての所作である。



刀の指し方



居合の演武前に刀を腰に指した後、このように刀を大きく動かす。帯と鞘の動きがよくなるようにする所作である。

夜間に襲われた場合の居合

香取神道流には太刀術の他に居合術があるが、すべて夜間に襲われた場合を想定している。居合腰と呼ばれる座った姿勢は、抜刀しつつ前後左右はおろか上へまで瞬時に移動できる姿勢であり、後世の居合のように正座で座ることはなく、左膝をつき、両足のつま先を立てた状態である。左膝をつくことにより、これを支点として自在に動くことができるのである。

また、低い姿勢をとるのは暗闇で敵に見つかりにくいためで、反対に低い姿勢の我方からは襲ってくる敵の様子がよく見えるのである。敵襲を察知したら灯りを消し、部屋の中でこの姿勢をとって待ち受ける。また、立合抜刀術は、夜道での不意打ちを想定した技である。ゆえに神道流の居合は「夜の居合」とも呼ばれる。

天真正伝香取神道流 太刀術

表之太刀 詳解及び崩し解説



五津之太刀
七津之太刀
神集之太刀
八神之太刀



表之太刀は香取神道流の組太刀の基本である。別名「陽の太刀」とも呼ばれるこの形は四本から成り、他流の形とは比べものならぬほど長い。動きも複雑なので封入のDVDの映像を合わせてご覧いただきたい。さらに初公開となる崩しも四本すべて解説した。本来、甲冑を着用しての形であるので、その隙をいかにつくか工夫されていることがわかるだろう。

付 両刀より 永月之太刀

極意小太刀より 半月之小太刀

水月之小太刀



1 双方相對して構える。手前は「巻き打ち」という肩から打ち込み素振りをして2回繰り返して、打ち込んでゆく。



2 巻き打ちで正面を打った後、後退する相手を清眼で攻めた後再び面を打つ。相手は避けて刃を受ける。

本来ならば首を切る

崩し

左上写真は太刀の刃で受け止めたところ。だが、受ける暇があれば斬れるのであり、隠された技としては、同じ体捌きで相手の首を右のように斬る。



実戦であればすぐに足を攻撃

崩し



本来であれば、②で太刀を打ち合ったまま、すぐに足を攻撃すれば、それで型は終わってしまう。続けるために下段で避けるのである。



3 受け止めた後、相手(左)はこちらの腰をねらって太刀を斬り下げる。これを太刀を下げ、膝下をカバーし、避ける。

総合的な形——表之太刀

「表之太刀」は入門してまず習得すべき組太刀であり、香取神道流が扱うその他の得物、薙刀、棒、槍などすべてに通じるエッセンスが詰まっている。

表之太刀には陽の構えから始まる「五津之太刀」、捨の構えからの「七津之太刀」、左上段の構えからの「神集之太刀」、清眼の構えからの「八神之太刀」の四ヶ条がある。入門者はさらに居合術の基本、「草薙之劍」も合わせて学ぶが、表之太刀を繰り返して修行することで、剣捌き、体捌き、相手との間合いなど様々なことを習得できる。さらに進むと「五行之太刀」五ヶ条へと進むが、表之太刀が甲冑を着けての斬り合いを想定しているのに対し、こちらは平常での斬り合いを想定しているという違いがある。表は間合いが遠いのに対し、五行では間合いがより近く、さらにスピーディーなものとなる。

それぞれの形は日本の武道の形として他に例がないくらい一本の技が長い。実戦で息が上がらぬようにトレーニングの意味があると、本来の技を隠すために、わざと技をつなげて形の



写真のように斬り上げて左内小手を斬った後、相手を攻める。相手は上段にこれを避ける。



7

相手はその太刀を右から張ってはげしに行く。



4

敵の正面打ちを形では太刀で受け止める。だが、崩しでは下の写真の如く右胴を斬ってしまう。

崩し

剣を受ける間に
胴を切ることも可能



5

相手が右水平に斬ってくるのを右側は太刀で打って避ける。

崩し

剣を張らずに
手首を斬る



崩し

受けずに脈を斬る



だが、これも本来は太刀を打たずにもう一步踏み込んで相手の内小手を斬る技である。

崩しでは太刀を張るのではなく、もう一步踏み出して手首を斬る。

続いて胴を突く

相手は受け止めるのではなく、その胴をカウンターに突く。



中に組み込んでいるのである。
例えば打ち込みを刃でがっちり受ける技が見られるが、本来は受けずに胴、小手などを斬っているのである。これを「崩し」と呼び、これまでは門外不出として秘されてきた。このたび後世に正しく技を残すため大竹利典師範の判断で四ヶ条の崩しを公開することにした。崩しは各動作のすべてにあるといっても過言でなく、誌面の都合上全部というわけにはいかないが、四ヶ条の特徴的な崩しを技の動作の中で解説してみた。封入のDVDでは師範に直々に解説いただいた。合わせてご覧いただきたい。

崩し

さらに柄頭を顔面に当てる

さらに受け止めた後、すぐさま立ち上がりそのまま右から柄頭を廻して顔面を打つ裏技である。



相手は正面真っ向を切ってくる。手前は太刀に手を添えこれを受け止める。



8

崩し

胸に突き込む

受け止めることは同じだが、それと同時に切っ先を相手の胸に押し込み突き刺すことができる。まさに攻防一如の剣である。ちなみに相手は突かれぬように⑧のように左足から踏み込むのである。



崩し

敵の攻撃を受けずに裏小手を斬る



相手の太刀を受け止めずに、はすかに右裏小手を触りに行く。動脈を傷つければ、相手の戦闘能力を奪えるので強く斬らずとも効果がある。

こちら(右)が右水平に相手の左胸を斬りに行くのを、相手(左)は太刀の刃で受け止める。



9



お互い陰の構えとなる。



さらに右面を斬りにいくのを、相手(左)は逆に斬って合わせる。これにより攻撃を止める。



こちら(右)が水平に相手の小手を斬りに行く。それを相手は右手を柄から離し、小手を防ぐ。

素早く首をめがけて斬り返す

崩し



相手が斬り合わせる前に、自分から一步踏み込み、相手の首に斬りつける裏技である。

ポイント

剣を受け止める間を作らずカウンターで攻撃する

太刀を受け止めて一拍置いてしまうと、相手とまた同じ条件で戦わねばならない。神道流の崩しは、その受け止める瞬間を攻撃の瞬間に置き換えて、カウンターで勝負を決めに行く技なのだ。受ける間があれば斬る工夫をせよということなのだろう。



太刀を裏(右側)で受けて右前方になやしたところ。

太刀をなやして止まるのではなく、なやしなから斬り込む。



その後左袈裟に大きく踏み込んで、折敷となる。ここでようやく五津之太刀が終了する。

13

七津の巻き



1
双方とも捨の構えをとる。他流の脇構えにも通じる構えであり、左半身にして腰を落とし、太刀を右側で水平にする。相手からは得物の長さが見えない。



2
左上段に構えて間合いを詰める。



3
そのまま、お互いに正面に振って太刀を合わせる。このとき左右の両足がそろろう。



4
さらに巻き打ちの構え。巻き打ちは左側から遠心力と手首のスナップを使って振り出す。

5



5
双方満眼の構えとなった後、我方(左)が剣先を付けたまま攻め込む。

6



6
相手(右)の太刀の下をくぐるように刃で巻き上げて。

7



7
巻き上げた勢いのまま、太刀を相手の胴に打ち込む。

8 巻き上げ、胴を二回斬りながら攻める



8
これを前進しながら二回繰り返す。右はこれを避けながら正面を二回、空を打つ。ただし、この動作でも相手の腕の上から裏小手を斬ることが可能だ。

9



胴を二回斬りながら 下がる

今度は右が攻め返し、正面を打ってくるのを下から巻きながら胴を斬る。これを後退しながら二回行う。

10



我（左）左が後退しながら胴を斬ろうとし、相手がせめながら小手を打ったところ。お互い空を切ることになる。



四度目の巻きで胴の相打ち

四度目の巻き。最後の巻きは相手も胴をぬらい、お互い左胴打ちとなり太刀を打ち合す。

相手の裏小手を斬る

崩し



形の上では剣道の小手打ちのように大きく打っていくが、実際は相手の腕の上にスッと剣先を滑らせるように持っていく。これだけで小手裏の動脈が切断できる。

受けたらすかさず突く



形は小手打ちを受けたまま続くが、受けて相手の剣を逸らすと同時に相手の胸に剣先を突き入れる技が隠されている。

裏小手を斬り上げる

下から裏小手を斬り上げる。実戦ではこれで決まってもおかしくないが、右が上段にとりながら下がつてこれを避ける想定。



小手打ちに対し刃で受ける

我は下段から太刀を上げて大きく右小手を打ってゆく。相手(右)はこれに合わせて太刀の刃を外に向け受けて逸らす。

12



13



本来は太刀ではなく小手を打つ

崩し



本来はさらに一步踏み込んで斬り上げた小手を打つ。ここでは技を続けるため右のように太刀を打っているのである。

上段より太刀を打つ

下段から跳ね上がった太刀を、今度は相手が打つ。これはあきらかに形のための打ち込みであり、ここにも崩しが隠されている。

14





体をかわす

この正面打ちに対し、左側に一步体を逃げてこれを大きくかわす。



16



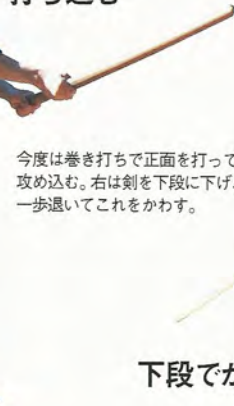
15



逆下段の構え

続いて相手が正面に打ち込んでくるのを、我は左足を前に出し、左手を柄に軽くかけ剣先を下げた構えで待つ。神道流独特の「逆下段の構え」である。

巻きを打ちで正面に打ち込む



17

今度は巻き打ちで正面を打って攻め込む。右は剣を下段に下げ、一步退いてこれをかわす。

下段でかわす



かわさず胸を突く

崩し



この正面打ちに対してもかわさずに胸を突く（あるいは斬る）動作が隠されている。相手が斬り込むと同時に胸に突き込む。

我は逆陰の構えとなり、切先を相手の顔面につける。そこから大きく剣を回して、相手の右胸に大きく打ち込む。相手はこれを太刀の刃を上にして受け止める。

胸打ちを刃で受ける



18

逆陰の構えとなる

19





20

さらに我（左）は、切先を相手につけて刃を上に向けた「真の構え」となる。相手は左上段に構える。

崩し 引かずに胸を突く

大きく胸に打ち込んでくるところを形では下がって刃で受けるが、我が胸を打つより速く相手も胸に突き入れることができる。



崩し 小手を斬る

本来は胸を打ちにきた相手の内小手を剣先で触れて下がる。木刀を打ち合わせる動作の中に小手を斬る技が、ここにも崩しとして隠されている。



相手は真の構えの我に対し、その左胸をねらって袈裟に打ち込む。我はこれを一步引いてかわしながら、打ち込まれた太刀を打ち払う。

崩し すぐに小手を打つ

技の中では我はこの後大きく太刀を打つ（写真24）が、巻き上げたたんに刃を下に返せば小手を打つことができる。これも隠された技である。



下から剣をはじき上げる

太刀が交った状態から、我はまた巻き上げるようにして剣を跳ね上げつつ攻める。





25

巻き打ちで正面打ち

続けて攻めながら巻き打ちで正面を打っていく。さらに逆陰の構え（写真⑧）をとる。



23



24

我は巻き上げた太刀の刃を下に返して右の太刀の棟を大きく打ちつける。



26

小手を斬り上げる



29

相手（右）が首を打ってくるのに対し下から小手を斬り上げる。右は柄から右手を離し小手打ちをよける。

右斜面打ち



27

さらに相手の右斜面をねらって斬り込む。相手は刃を右にしてこれを受ける。

30



28 陰の構え

互いに陰の構えとなって間をとる。

我は折敷となりながら大きく袈裟に打ち込んで止める。七津之太刀がこれで終了する。



2

双方左上段となって構える。左上段から始まるのが神集之太刀の特徴だ。



1

上段から振り合せて双方清眼となる。我（左）がそのまま剣先をつけて攻め込んでゆく。



崩し

本来は左腕を斬る技

形の動作ではこの後相手の太刀の棟を打ちに行くが、本来は左腕を上から斬り落とすのである。

下から斬り上げて裏小手をねらう

3



下から太刀の刃を上に戻して右小手下を斬り上げる。相手（右）は右手を離してこれを避ける。

5



続けて巻き打ちで攻める

その勢いを持續してそのまま巻打ちに正面を打っていく。



4 崩しのようにならず、太刀の棟を打ち付ける。なおも攻め続け……。

崩し

受けずにカウンターで
首を突く



ここでも受け止める間があるなら、袈裟斬りに相手の首の左をねらって斬り込むのが本来の技。



相手は太刀の刃を左に向けてこの打ちを受け止める。

8

巻き打ちを返す

今度は相手が巻き打ちで正面を打ってくる。



右は相手の下段をねらって斬り返す。我は退いてこれを避ける。

9

崩し

受ける間があれば、斬る！
抜き胴を斬る



これも正面打ちを受けるのと同じタイミングで相手の胴を抜くことができる。本来は右側に避けるのではなく、右前に体を進めて胴を斬るのである。



我は右側に一步体を逃がしながらこれを受け止める。

受けずに本来は逆胴を払う

崩し



崩しでは右方向に避けたが、本来は左方向に体を移動しながら逆胴（左胴）を払いながら避けることもできる。



10

我が巻き打ちで斬っていくのを、相手（右）は右方向に体を避けながら太刀の刃でこれを受け止める。

刀を左に倒して平突き

ポイント



剣を平にして突いたところ。刃を横にすると立てて着くよりも有利である。たとえ突きがはずれてもどこかを傷つける可能性がある。



腹への突きを
上段でかわす

11



我はすかさず太刀の刃を左方向に向け、太刀を平に返して平突きに腹部を突く。右は上段となり、一步退いてこれを避ける。

太刀を押さえず、
小手を押さえる

崩し



崩しでは突きを打ち落とすのではなく、手を伸ばして上から相手の内小手を斬る。

右は上段から太刀を振り下ろして、突きを打ち落とし、突きを打ち落とし、太刀を押さえて間合いを詰める。

打ち落として
詰める

12



相手より先に腿を斬る

崩し



相手が胴に斬り込んでくる前に剣先を腿や胴に滑り込ませて斬る崩しである。

13 まわり込んで胴打ち



我は左方向にまわり込んで袈裟斬りに右胴に打ち込む。相手は太刀の刃を上に向けこれを受け止める。

14



我（左）は続いて巻き打ち。相手（右）は太刀に手を添えてこれを水平に刃で受ける。

崩し すり落としからそのまま突き込む

崩し



崩しでは太刀を受けてすり落としまでの間にその切っ先を相手の喉元に突き込む。



14 すり落とす

そのまま、太刀を右方向にすり落としながら押さえ込む。

受けずに裏小手に斬り込む

崩し



大きく体を退いて胴打ちを受けているが、本来胴打ちをかわしつつ右小手の裏を斬って勝つ技である。



16

陰の構えとなって向かい合う。

面打ちを受け

18



我が左斜面に打ち込むのを、相手は刃で受ける。省略したがこれも一步踏み出せばカウンターで相手の首を斬る崩しを含む。

胴打ちをかわして受ける

17



相手(右)が胴に斬り込むのを、我は一步引きながらこれを受け止める。



20

続いて相手の太刀の棟を上から打ち付ける動作で技を続ける。

崩し

これも写真では省略したが太刀を打つのではなく、もう一步進んで小手に打ち込むことができる崩しである。

19



剣を下から跳ね上げる

再び①同様に相手(右)の胴打ちをかわした後、剣をくぐるように下から巻き上げ跳ね上げる。

我（左）が巻き打ちに出るのを刃を外側にして相手が受ける。



22 相霞の構え

お互いに霞構えとなり切先を相手の目につける。



24 巻き打ちと受け

崩し

この後、右は剣先を落として左の小手を打ち、我は刃を上にして下から小手裏を斬り上げるという崩しを含む。



23 再び⑰と同じように胴打ちに対して受ける。本来左は避けずに裏小手に剣先を入れて動脈を断つ技を含む。



24 巻き打ちで攻める

我が巻き打ちで小手に出るのを右は退いてかわす。さらに我は相手の太刀を巻きながら右胴を斬りに行くが相手は太刀の刃を上に戻して受ける。



右から袈裟に斬り込む

我は攻めて折敷となり相手の左袈裟に切り込んで終わる。



八神之太刀——前後左右に大きく動いて斬り合う



5
我（左）が巻き打ちで面を打つ。相手（右）は刃を右に向けて受け止めて巻いて下に落とす。



1
距離をとった状態で清眼の構えで双方対峙する。



2
相手は飛び込んで我の左胸に打ち込む。本来これは胸を突く技だが、技をつなげるため胸に斬り込んでいる。



3
我は大きく退いてこれを受ける。



4
他の技でもあったように、下から巻き上げて相手の太刀を跳ね上げるようにしてぐり、太刀の棟を打ち付ける。



6
双方、太刀の柄頭に掌を当て右手を添えた構えをとる。草摺の下の大腿部をねらう。

剣をくぐって小手を斬る

崩し

ここでも剣を打つのではなく、一歩進んで小手を斬る。このように太刀を打つ動作には崩しが存在する。



突いた後刃を返してすぐ小手を斬る

崩し



腿を突いた後、刃を下に返せばすぐに裏小手を押し返せることができる。本来はここで勝負ありだ。

大腿部を突く

7



相手の腿を突き合って相突きとなった状態。

反りを使って受ける

9



相手が我（左）の小手を打ってきたので、これを太刀の刃を右側に向け、反りを使って逸らせる。

真の構えとなる

10



双方真の構えをとる。剣を抱いたような独特の構えであるが、古流各派に似た構えが見られる。



相手（右）は剣を大きく回して袷袢に斬る。我は大きく退いてこれをかわす。

11



崩し

この崩しでは、相手が下がる前に首をねらって斬り込むことを伝えていく。「真の構え」に構えた後頭部に斬り込む。



13



12

小手を斬り上げる

我（左）は下から刃を上にして小手を斬り上げる。右はこれを手を離して避ける。神道流独特の動作だ。

我は左側に回りこみながら敵が片手に持つ太刀に向かって打ち込む。

本来は腕を切断する

崩し



本来は一步前方に踏み込んで、腕そのものを切断する。ここでも木刀を打つ動作に崩しが隠されているのがわかる。

正面打ちを巻き落とす

我が続いて巻き打ちで正面に打ち込むのを受けて下にすり落とす。

腿をねらって突く動作。甲冑では草摺下の太腿は急所となる。



14



15

受け止める間なく首を襲う

崩し

本来相手が受け止める前に首に入る技だが、形では受け止めやすい角度で入って受けさせているのである。



斜面を打つよりも首をねらうのは、兜と甲冑の合間に斬り込んでいくという意味。同流の古さを物語る。



16

右が首をねらって斬り込むのを、我は刃を前にしてがっちり受け止める。



形ではこのように剣を立てて横からの斬撃を受け止める。

18



左の正面打ちを太刀に左手を添えた一文字で受け止める。

17

受けた相手の小手を斬る

崩し



受け止められたら手を返してすぐに腕を横に斬る。ボクシングのコンビネーションブローのようだ。



裏小手を斬り上げる

さらに退く相手に下段から斬り上げる。相手は左上段でこれに応じる。

20



なおも我（左）が胴に斬り込んでいくのを、右はさがりながら受ける。

19



正面打ち返し

正面打ちで攻め返す。この場合も構えた敵の太刀に向かって打ち込む。

21



崩し

剣を受けずに裏小手を斬る

今まで同様、敵の剣に合わせるように、小手里に剣先を入れて薙いで下がる裏技である。

崩し

正面打ちに合わせて
そのまま左胴を斬る



形ではこの正面打ちを避けるが、そのまま合わせて右胴を斬る。または胴を突き通す。

逆下段の構えとなる

22



左半身となり右手に剣を持ち、左手を添えた独特の逆下段。右は巻き打ちで正面に打ち込む。



避けた後、我が正面打ちに転じるのを、右は太刀の棟で受け、反りを活かして右側方になす。



さらに我が巻き打ちに出るのを右は受け止め、体を右側に回りこませる。

突きをかわす

24



左胴を打つ

続いて左胴に斬り込む。胴はちょうど腰の甲冑でいうと揺ぎの糸あたりをねらう。

そのまま首にめがけて刃を左に向けた平突き。たとえ突きが決まらなくても刃を寝かしているので、首の動脈を斬る可能性の高い技である。我（左）はこれを退いてかわす。

下段で斬り結ぶ

30



今度は右腕に斬り込もうとする。我はこれを避けながら右腕に斬って太刀打ちとなる。本来は我が相手(右)の上腕を斬る崩しでもある。



27

この腕打ちに対し、我(左)は後退しながら剣を合わせて受け止める。続いて我が小手に攻め返す。

巻き打ちより下がって清眼

31



両者巻き打ちを素振りながら下がって清眼となって対峙する。

清眼で攻める

28



両者清眼の構えとなり、我(左)は剣先をつけて攻め込んでゆく。

上段に対し下段

32



我は下段、右は左上段となりお互い距離を詰める。



29

追い込まれた相手(右)は大きく踏み込んで。

受け流して袈裟に斬る



33

上段からの打ち込みを刃で受け流し、右に体を転換させて袈裟に斬り込む。受けずに右腕を斬る崩しもある。

払った剣ですかさず右腕
または腕に斬り込む

崩し



図から③への崩しである。形では相手が合わせて下がるが、素早く腕、もしくは右腕に斬り込む技。

両刀——太刀と小太刀を車輪の如く繰り出す

永月之太刀

二刀といえば宮本武蔵の創始のように思われがちだが、それより発生の古い神道流です。二刀を使う技が創始されていたと思われる。両刀を大きく車輪のように回す独特の技法が特徴的だ。

めまぐるしい動きで二刀を使う

これまで見てきたように神道流の技は古流剣術のなかでも最も長い。剣術では「表之太刀」を習得した後、「五行之太刀」五ヶ条へと進む（技はDVDを参照）。この技も動きは長いが、よりスピーディーな印象で、甲冑を着用しない想定ゆえに間合いがより詰まるのだという。跳躍するような動作も多く、稽古者は「表之太刀」以上に息が上がるだろう。

剣術ではさらに極意に近づく技として「両刀」がある。これにはこの頁で解説している「永月之太刀」以外にも「水月之太刀」「磯浪之太刀」「村雲之太刀」の四ヶ条がある。

この両刀も激しい動きが特徴だが、極意に近づくため技の長さは「表之太刀」などに比べるとかなり短くなっている。技で特筆すべきは、両腕を車輪のようにグルグルと回し、敵に攻撃のゆとりを与えぬように斬りかかることで、上からだけでなく下段からも斬り上げることだ。体を左右転換しながら大小の剣が伸びる。一刀を受けた刹那、もう一方の剣で斬られる……。凄まじい剣である。



1 双方、清眼に構える。左の両刀は右手で太刀を抜いた後、左手を上手く使って片手で小太刀を抜く。DVDの映像をご覧ください。



2 右、陰の構え（八相）に対して我（左）は両刀を体の横に垂直に立てた二王位之の構えとなる。

ポイント
十文字に受け止めるときは小太刀を前にして受ける



大、小二刀で受け止める構え。この直後、小太刀で受け止めた剣を払い、太刀で斬り込むため、小太刀を前にして受ける。小太刀が後ろだと前の太刀が邪魔になり、剣を振り払えない。



3 右の巻き打ちに対し、両刀を十文字に構えてこれを受け止める。一刀で受ける場合同様、二刀で受ける場合も刀の刃で受け止めることが大事だ。



5
相手が体を右へかわしつつ、我の左斜面を斬りにくる。我は太刀の刃を左方向に返してこれを片手で受け止める。



4
小太刀で敵の剣を左に振り払い、同時に太刀で相手の正面を襲う。相手（右）はこれを刃で受け止める。この受け止める動作には当然崩しが隠されている。



6
今度は我が体を左半身に転換しながら小太刀を下から大きく回して斬り上げる。相手（右）はこれを避けながら受け止める。

さらに休む間もなく車輪のように右手に持った太刀を繰り出す。左右連携した回るが如き動きは庄巻だ。



9
刹那、再び小太刀で剣を払い落とし、同時に太刀で斬り込んで残心する。これで永月之太刀が終了する。



8
それを受け止めた相手（右）は正面に打ち返す。これを我は片膝をついた姿勢で入身し、再び大小二刀で十字に受け止める。

極意小太刀——奥義とされる究極の剣技

半月之小太刀



1 居合術同様双方いまだ剣を抜いていない想定。「抜身の構え」から始まる。柄に手を裏返して置く。(10頁参照)



2 左の小太刀、右の太刀同時に抜きつけ、下段で切り結んだ状態。



3 ずかさず、右の太刀が正面を襲う。これを我(左)は片手で小太刀の刃で受け止める。



4 続いて腹を平突きに突いてくる太刀に対し、小太刀は跳び込み切っ先を落とす。右の太刀の手元を押さえ込む。太刀はこれを退いて避けようとするが小太刀はそのまま攻め込む。



5 たまらず太刀は上段にとるが、それより早く我(左)はその小手を押さえ、小太刀の勝ちとなる。相手に反撃の間を与えない、気迫の攻めが小太刀の極意である。

神道流の技の中でもこの小太刀の形はあつという間
に終わる。だが、太刀に負けない小太刀の攻めは激
しく、その剣捌きは極意にふさわしく速い。

使い手により太刀を圧倒

神道流剣術の極意のひとつとされる
のが、この「極意小太刀」である。長
く構成されている神道流の技の中でも
っとも短い。実際、小太刀で太刀を相
手にするには一瞬の隙を突いて懐に跳
び込むしかなく、長い技は必要ないの
かもしれない。技は抜身の構えからの
「半月之小太刀」、逆の捨の構えからの
「水月之小太刀」、清眼の構えからの
「清眼之小太刀」の三ヶ条である。

小太刀は一般的に太刀に比べて不利
と思われがちだが、修練を積むことによ
って太刀同様に使うことができるよ
うになる。二尺三寸の太刀(江戸期打
刀の定寸)に対し、一尺五寸の小太刀
であつても片手で使い、体を半身にし
て使うことによって構え合わせた剣の
長さを同等とすることができるのであ
る。もちろん、これを太刀同様に使い
こなすには相当の修行を積みねばなら
ない。ちなみに神道流の修行は「目録」
「免許」「極意」の三段階があり、現在
でも誓紙血判の上で入門した後、これ
らを目指すことになる。極意は人生経
験を積んだ四十二歳に達さねば何人た
りとも受けることはできない。

水月之小太刀

小手に斬り込んでくる太刀を我（左）は小太刀の刃で受け、右外側にはじき返す。



陰の構え（八相）をとる太刀（右）に対し、小太刀（左）は逆の捨の構えをとる。



太刀は正面に打ち返す。これを我は小太刀の切っ先を右に向け刃で、受けておいて……。



そのまま我は太刀の右小手をねらって斬り込むが、太刀はこれを右外にいなす。



5 その勢いで太刀の正面に打ち返す。これを太刀はからくも受け止めるが、小太刀は攻め続けて身を沈め、上段にとらんとする太刀の胸を斬り勝ちとなる。

香取神道流と密教

香取神道流は武術以外にも忍術、築城術、方術や気学を含む陰陽術、真言密教の呪文、軍配法など、中世の人間が知り得た最高の知識と技術を伝えて

られる。いわば密教の思想体系のなかから生み出された武術といえ、密教の有する様々な呪法、法術というものが伝わっている。

なかでも陰陽五行説に基づいた陰陽術の考えが広くその知の体系のなかにある。すなわち木、火、土、金、水の五つの気についての相性、五行相生・相克などから天地自然の理を説明しようとし、人体も五行から成り立っていると説く。また、方術に基づいて建築をする築城法も伝え、実際に師範宅はその築城術に基づいて建てられている。十二支に基づく方術だが、実際に針と糸を使い設計する実学的方法も伝え、さらに侵入者を発見しやすい畳の敷き方など、現在でもそのまま日常利用でできる新鮮な技術さえ含まれる。まさに「兵法は平法なり」といわれる所以である。

その一部が九字の印であり、「臨兵闕者皆陣列在前」それぞれに手を結び合わせる印があり、この印を結ぶことによって精神を統一し、雑念を払って無我の境地に入るのである。

また、兵法十字の法は刀印、または知剣の印を以って右手の指先で左の掌に九字を切り、さらに「太・龍・鬼・勝・一」の一字を加えて十字にする。昔の刀や鐔には九字に線を切った後、点を打ち、十字に祈念したものがあ

る。これらは下のような「目録之巻」にも記されて伝えられる。巻物の前半は剣術など技術的内容が中心だが、後半は下のように陰陽術、密教と深く関係した内容となっている。真言密教は戦国の武将たちにもっとも信じられた教

義であり、また教えの呪術的な部分は修験道と武術の関係もろくががせ興味深いものである。

義であり、また教えの呪術的な部分は修験道と武術の関係もろくががせ興味深いものである。

天皇正位
香取神道流
目録之巻

抑兵法者儒者道之根元也故
平法者深然者則上者者浅
深二種之法平法と事得て欲
先祖
敵藤伊賀守天竺入道成威者
家直命
身社登取大神也平法者道之滿
象至天地陰陽之神神中大天
降り座須天皇則神変童子之
魚形身成威者向爲給平法事社
三倉龍也平法大望威就有一米ト
梅之木止平法者一卷操守也
給平法今其秘術行曰男子爲
者平法知平法平法平法平法
人勝平法神道流建立也觀古今
人不平法神道平法得平法者
雖然日習則不敵者死也古
語曰平法之極曰煉有奇特
依而奇特得神變也
大一种道流是微來雖千更
至平法者日習則知要訣
雖然終遠則妙理知也
大神道流儒者道之根元也故
妙用也戰術身保平法之身
安下一般也大神之位操平法
筆紙盡難殊他敵向要虎
千神、祈大神之術、操守、
大勝平法古語曰念力微者
！平法信平法有名譽、得平法
皆神基也成心依也大神難入
先不能執流者四方八面於六曜之
手留之術長短三種懸引引平法
始神道流一人女子之將軍也
一生之平法也護而將軍也
依而千金位可神上云云

神道流表 四條之太刀
一 五津之太刀
一 七津之太刀
一 神保之太刀

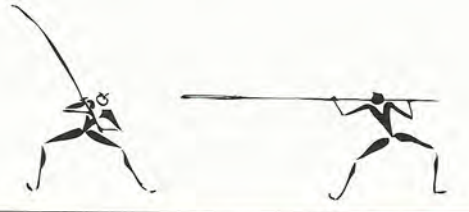
「目録之巻」の前半部分。まず「兵法は儒者道の根源也」と平和を諷い、流派の発生から始まって表之太刀など具体的な技の説明へと続く。

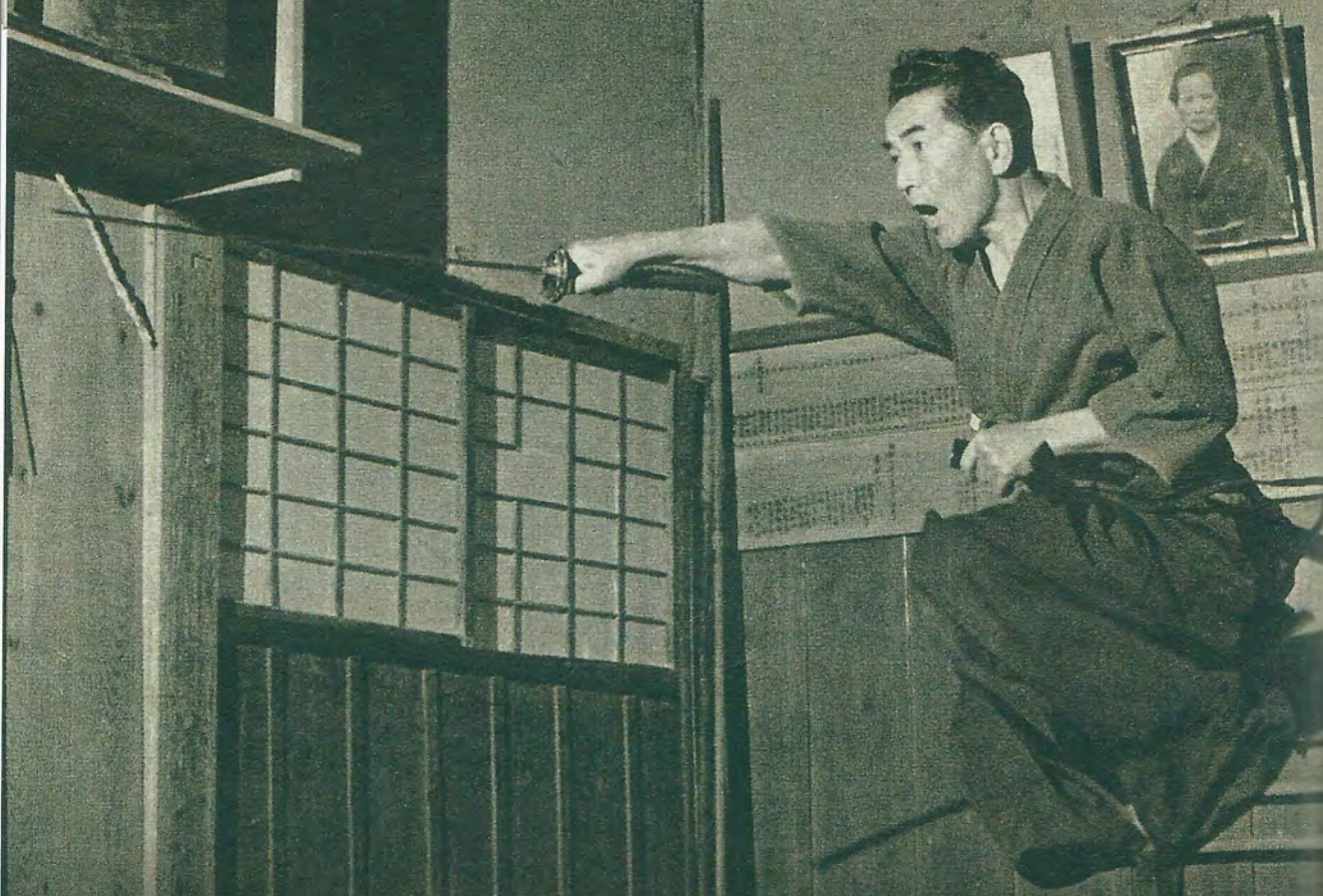
不動心水月之位
コ捕他言故不可不但免許根底
教之時位也云々也

兵法十字之法
軍人何言毛勝其是元用
之六勝則得勝也
夜而天移高有所行
時用高有文
海川ヨ流ハ時天風向印用
水ナリ降上リ
龍 穗子被立道中免難降
行 敵方行平法事社
命 神在根底參詣放念大高位
日 其月災難降上リ
月 夜中災難降上リ
合 我刀敵刀人文字平法
太 我刀敵刀人文字平法
人間足留之法
敵刀削切人形書而足
姓名等書之是針十字

上 賦 兵衛平法
下 賦 兵衛平法
敵刀削切其中中敵者書
人形文字本軍書中入封
封上書之無九字者
敵真平法南東也南東引
力行ク人足留止上リ

中盤から後半にかけては、このように呪術的内容が多くなる。十字の法のように武術的呪法から、人間足留の法のように日常具体的な名のまである。





天真正伝香取神道流 剣術

居合術 詳解

表居合より

技附之剣

右剣

左剣

八方剣

立合抜刀術より

前後千鳥之太刀

行合右千鳥之太刀

逆抜之太刀

天真正伝香取神道流剣術のもうひとつの魅力は、実戦的な居合術だ。縦横に大きく跳躍しながら素早く抜きつけるこの勇壮な、居合は四代山城守盛綱のころにはすでに完成していたといわれる。他の居合に比して時代も古く、純粹に伝えられた居合術であるが、既に太刀ではなく打刀としての刀法になっている点も興味深い。

写真は昭和50年代、抜附之剣を演武する大竹利典師範である。場所は香取神宮裏手にある飯篠宗家の道場。築300年以上の道場は現在でも節目の稽古に現役で使用されている。

表居合

拔附之剣

低姿勢から跳躍し、敵を制する



居合腰

まず、かかとの上に腰を下ろした居合腰で構える。姿勢を低くするのは、夜の室内などで待ち伏せする場合、敵から見つらく、我からは見やすいためである。水平に抜きつけるため刀を横に寝かせ、同時に柄の上に右手の甲をつける。



抜きつけ

前方から歩んでくる敵に対して、機先を制し大きく跳躍して首、こめかみなどに鋭く抜きつける。敵の意表をつくこの「拔附之剣」の抜きつけは香取神道流の真骨頂である。

剣を自在に使うことを目指す居合

香取神道流をもうひとつ特徴づけているのが居合術である。この居合には腰を下ろした低い姿勢から行う「表居合」と立った状態から行う「立合抜刀術」がある。どの技も動きがダイナミックで素早く大きく体を使う技が多いが、意外なことにどれも明確な敵の想定があるわけではないという。どうやら技の組み立ては、いつ如何なる状態で襲われても不覚をとらぬようありとあらゆる状態で行う、応じられるように考えられているらしく、剣を自在に使いこなす修練の意味合いが強いようだ。だが、組太刀が「明日の仕事を考えながらも出来るように」と徹底した体への技の練り込みを目指すように、何万回という修練によって剣が自分の手足のごとく使えるようになることを目指すのであろう。

具体的な特徴としては、その跳躍の大きさである。全体的な想定が夜襲に応じることであるため、身を沈めて敵に見つかりにくくし、その機先を制して一挙に跳躍、その首などに抜きつける「拔附之剣」そのまま頭上から唐竹割りにする「抜討之剣」などは、神道



敵が傷つきその場に沈んだ、または浅手を受けながら攻撃を仕掛けてきたので、刀の棟に手を添え刃を上に向ける。

4



そのままの姿勢で着地する。切っ先は前方に鋭くつけたままである。

3



体の転換

そのままの位置で体を転換し、今度は刀の柄を前方にし、敵の一太刀から体をかばう。

6



突き

そのまま前方の敵に向かって刀を突き込む。そして素早く抜く。

5



7

斬り下ろし

敵に向かってとどめの一太刀を斬り下ろす。後代の居合の流派に比較するとやや手の内が固いように見えるが、甲冑武者さえ斬り下げようとする古流の特徴である。

流の居合術が実戦的であることをよく表している。

右剣うげん

右前の敵の機先を制し抜きつける

右に跳躍して抜きつける



右方向に大きく跳躍しつつ水平に抜きつける。抜きつけは肩から一直線に剣先が伸びるようにおこない、柄が右腕の下に入るようにする。

襲撃してきた敵が自分の右斜め前方にいる想定。剣を外側に倒し、柄に手をかける。

胸元に引きつけ突く

剣の刃を左に返し、いったん胸元に引きつけ、このまま敵に対し突きこむ。この場合、はずれても首などを斬る効果も期待し、刃を横にした平突きである。



体を転換した後 斬り下ろす

剣先を敵に向けたまま刃を上にし、頭上左手で剣の棟を支え「鳥居の構え」となった後、写真のように左右体を転換、右手右足が前となる。裏技として、このまま柄を敵の顔面に打ち込むこともある。この後上段から諸手で真っ向を斬り下ろす。





1

自分の左斜め前方に敵がいる想定。
また、自分の右が壁など動けぬよう
に詰まった想定である。

左に跳躍して抜き打ち

左に大きく跳躍するが、右に敵がいる場合と違い、抜きつけでは間合いが合わぬ可能性がある。そのため片手抜き打ちで左袈裟（相手にとって左の肩口）に斬りつける。さらにもう一度片手で頭上を囲うように振りかぶり、再び大きく片手袈裟に斬る。複数の敵、あるいは敵の反撃を想定した動作であろう。



2

左剣
—— 左前の敵に対し抜き打ち

3

刀の刃を返す

左に大きく流れた剣の刃を素早く返し、左の手を棟に当てて大きく逆袈裟に斬り上げる。



4

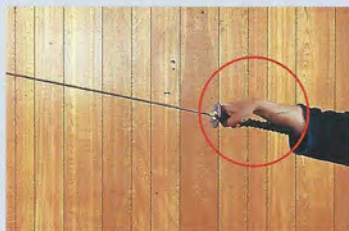
斬り上げて突く

さらに剣先を敵につけ、刃を上に向けたまま突き入れる。この後右剣同様、体を入れ換え、上段に振りかぶって斬り下げるのである。

ポイント

抜きつけたとき剣の柄は右腕の下に入る

このように神道流では抜きつけた剣の柄は右腕の下に入り込む。それだけ剣を一直線に伸ばせという意味と、このようになればたとえ上から叩かれても剣を落とさない。そのための心得でもある。



抜きつけたときの柄の様子。腕の真下に柄がきえている。



技刀

場所が思うに任せぬ想定。抜きつけできないので、抜刀した剣を水平に我が前方に構える。



立ち上がる

歩んでくる相手に対するのでスッと立ち上がり……。



斬り下ろし

上段から腰を下ろしながら真っ向を斬り下ろす。

上段にとる

体を一回転して上段に振りかぶり、一瞬全ての方向の敵に備えたとともに、牽制。



臨機応変に抜くための技

実戦そのものの「抜附之劍」などと比べると、この「八方剣」は前後多数の想定となり、ややどのように敵に対していいのかわかりにくい。だが、このような厳しい状況に陥っても自在に剣を振るい、多数の敵に応じて死地を切り抜ける技を体に覚え込ませれば、

いざというときに体が反応するのであろう。かつて多くの流派が剣術において、この弛まぬ形の反復練習によって実戦度を高めていったのだが、後世それは自在に打ち合える防具稽古に取って代わられた。だが、真剣を使う居合術においてはどの流派であろうと反復しか上達の道はない。それは諸派の源流、神道流でも同じなのである。



4

剣を振りかぶる

剣をこめかみの隣りに後ろを突くように振りかぶり、後ろから攻撃せんとする敵を牽制。



3

前方の敵を突く

そのまま前方の相手の喉を剣を平にしたまま突き通す。このときすでに後ろからも敵が迫っていることに備えている。



5

後敵を斬り上げる

その剣を体を左半身に転換しながら後ろ方向に大きく斬り上げる。後ろの敵にとっては、見えづらい下から、意表をついて剣が跳ね上がって斬られるのである。

立合技刀術

前後千鳥之太刀——歩行中前後からの敵に応じる



1
後方に殺気を感じる
歩行しながら後ろに抜き打ちの気配を感じる。柄を胸元に引き寄せて鯉口を切る。



受上をかばい、斬りを受ける

刃を上に向けて抜刀し、後ろからの攻撃から頭上をかばう。鞘は大きく抜き出し、左足を自分の右前に踏み出す。この足の様子が千鳥に似ていることから技名となったと思われる。



3
その左足を中心に回転。足を右前に踏み出したことよって真後ろに向き直ることができる。

さらに後方からの攻撃を受ける

納刀し終わるや再び素早く抜刀して頭上にかざす。足は先ほどと同じく左足を右足の前に進める。



納刀

そのまま倒れた敵に残心しながら納刀。



4



5

右に回転しながら真後ろの敵を斬る

振り向くや真後ろの敵を真っ向から斬り下ろす。

向き直り斬る
さらに右回りに回転して真っ向を斬り下ろす。足は大きく踵木に開いて踏み張るのが神道流の特徴である。



7

ゆきあいみぎちどり
行合右千鳥之太刀——右前方より接近する敵を斬る



右前方へ
抜きつけ

右前方の敵に抜きつけたところ。敵の首めがけて切っ先が水平に飛んでいく。

手掛け

柄に手をかけ刀の刃を外側に倒し、抜きつけの姿勢となる。同時に大きく右足から右斜め前に踏み込む。

歩行

歩行中、敵の殺気を感じる。敵は我よりも右前方より接近しており距離がある。



間合いを詰め斬り下ろす
剣を上段に振りかぶりながら、のける敵に向かつて大きく踏み出し真つ向から斬り下ろす。

逆抜之太刀

前方に向かったまま前後の敵を斬る

立合抜刀の姿勢



1

2 柄当て

前方から、敵が剣を抜いて斬りかかろうとするので、機先を制し、柄に手を掛けた敵の手の甲を柄当てる。



3 逆手に持つ

すかさず柄を引き上げ、次の動作に備えて後ろ足を引きつける。同時に手は柄に逆手に掛ける。



3

逆手で抜刀

スッと抜刀する。刀は逆手に握られ、柄頭でなおも前方の相手を牽制している。この以前から後方の敵の動きも警戒している。



4

正面を斬る

そのまま左肩から正面を斬り下げる。前方の敵もこれにより斬り倒される。

納刀

「立合抜刀」では立った姿勢から始まっているので納刀も座らずに立ったまま行う。



5

後方を突き刺す

まず逆手に持った刀を後方へ突きこむようにし、さらに諸手に持ち替え、左肩付近に担ぐようにもってくる。自分の後ろから組みつかれた場合の対処である。



6



7